第１回「文学のまち大津」推進協議会　会議録（要旨）

１　開催日時　令和８年３月３０日（月）　１５：００～１７：００
２　開催場所　大津市役所　新館２階　災害対策本部室
３　出席者　委　員　　８名
（只友委員、加藤委員、鷲尾委員、七里委員
福井委員、金子委員、角間委員、福永委員（今村委員代理））
事務局　　７名
（川島市民部長、東市民部次長、文化振興課：井上課長、中嶋補佐、
栗山副参事、山本学芸員、井口学芸員）
傍　聴　　１名
４　内　　容

１）開会
２）委員紹介
３）座長、副座長の選出（座長：只友氏、副座長：加藤氏）
４）座長挨拶
５)「文学のまち大津」の概要
「文学のまち大津」の概要について事務局より説明

質疑

【委員】
文学に関する予算は、今後増えていくのか。

【事務局】
令和８年度は、協議会のほかに文学イベントに関する実行委員会を設置し、湖都の葉マルシェのほか、さまざまなイベントも含めて 1,000 万円の中で実施していく予定である。その後については、まず戦略を立てることが最優先であるが、ユネスコ創造都市ネットワークに加盟した場合に国際的な事業をどこまで実施するかなど、全体のバランスを見ながら、どこまで予算化できるのかについて、事務局として検討していく。

【委員】
掘り起こしというのは、具体的に何を掘り起こしているのか。

【事務局】

今年度から文化振興課に学芸員が２名増員され、各種文学団体へのヒアリングや、大津の文学作品の調査、句碑などの地域資源の調査を実施し、現在一覧としてまとめている。今後これらの資源をどのように活用するか検討したい。

【委員】
この部分は非常に重要であり、単にどのように掘り起こすかということだけでなく、その後どのように活用するのかという点が、どのような大津を目指すのかにつながってくると思う。

６）報告事項
ブランディング戦略骨子等をアルパックより説明

７）意見交換

【委員】
文学のまち大津を進めるにあたっての前提として、大きく２点ある。
まず大前提として、市民全員に「文学のまち」という意識が浸透している状態をつくる必要がある。
１点目として、拠点が必要である。昨年、彦根に文豪カフェができ、それ自体が「文学のまち」としてのブランディングとなっている。したがって、大津でも彦根をそのまま真似する必要はないが、訪れた人が文学のまちとして実感できるような拠点、例えばカフェや図書館など、そうした拠点があった方が分かりやすいと思う。
また２点目として、文学のまち大津に関わる人材について、市はこれまで活躍された方や過去の人物を中心に考えているように見受けられるが、これからの未来が重要であり、作家を育てる育成講座やライターインレジデンスなどがあった方がよい。本気で「文学のまち」でいくのであれば、未来の作家を育てることにも力を入れていくべきである。

【委員】
今の発言は、人材の発掘にも関わる内容である。例えば、各小学校で地域学習の一環として、句碑や歌碑、お寺などを巡り、地域全体でマップを作るなど、地域として盛り上げていく取組が必要である。当事者として活動に参加しなければ、十分な盛り上がりにはつながらない。

【委員】
文学のまち大津の目指すべき方向性として、大津のまちが抱える課題を「文学」によって解決するという視点が重要ではないかと考えている。私が考える大津の最大の課題は、

新旧住民の交流が少ない点である。中心市街地でも同様であり、仰木などの地域においても、互いに交わる機会が少ない。

このような地域においても、文学をきっかけとして交流が生まれ、課題解決につながる可能性がある。実際に、木之本の江北図書館で古本市に出店した際には、多くの人が集まり、出店者同士や新旧住民同士の交流が深まっていた。

大津においても、こうしたイベントやカフェなどの取組を行っている人たちとネットワークをつないでいくことが重要であり、湖都の葉マルシェのような大きなイベントとともに、地域住民による小さなイベントも大切ではないかと思う。

【委員】

AI の進展により、子どもたちにどのような力を身につけさせるべきかという点については、大きく 2 つある。1 つは個人としての能力、もう 1 つは社会の一員としての能力である。

例えば、朝の 10 分間読書のような取組は有効であると考えるが、大学生は負担に感じる場合もある。現在は子どもでも AI によって容易に答えを得ることができるが、実際の状況に直面した際に、それを解決する力を発揮できるかというと、それは容易ではない。これは学校教育の役割である。

また、こうした課題については地域住民全体で考えていく必要がある。湖都の葉マルシェのような取組も重要であるが、課題に対してどのような仕組みを作り、誰が担い、どのように関わるのかという点が行政にとって重要である。

学芸員や文化振興課が仕組みを作るだけでなく、プロモーションを通じて市民が「面白い」と感じ、自ら取り組み、それが良い仕組みへと発展していくことが理想である。

行政は予算や制度を整えるだけでなく、市民の関わりをいかに引き出すかが重要であり、市役所が関与しなくても自走するような状態を目指すべきである。

【委員】

大津は一つにまとまることが難しい特性を持っている。中心市街地を起点としながら合併を繰り返し、瀬田、坂本、堅田など、それぞれに個性を持つ地域の集合体となっている。これらの個性的な地域を「文学のまち大津」という枠組みで一体化できないだろうか。

【委員】

拠点はあった方がよい。相談事があった際に話を聞いてもらえる場所や、安心して人と人がつながることができる場所が必要である。新旧住民が交流できる拠点があれば、課題解決にもつながるのではないか。市役所はやや堅苦しいため、より気軽に訪れることができる場所が望ましい。

【委員】
　今の発言は、安心して様々なものを集約できる場所の必要性を示すものであると考える。ただし、市役所として対応できる範囲には限界があるため、市民主体でより幅広い取組ができないか、住民参加の仕組みについて、この協議会でも検討していきたい。

【委員】
　文学資源は必ずしも歴史的なものである必要はなく、自然や風景、日常生活など、さまざまなところから生まれるものであると考えている。それらを文章として表現するという視点を取り入れることが重要である。
　そのためには人の感受性が重要であり、感性を磨く取組を教育に取り入れていく必要がある。文学が一部の人のものとなってしまうのは非常にもったいなく、誰もが関われるものとして広げていくべきである。文学を通して世界の見え方が変わる、そのような喜びを多くの人が感じられるようにしていきたい。

【委員】
　おっしゃるとおりであり、世界観の違いという観点から漫画の扱いも含めて検討する必要がある。文学は決して高尚なものに限られるものではなく、日常の中で口ずさむ言葉や、21 文字のメッセージなどもまさに文学であり、誰にとっても身近なものである。
　また、AI 時代において教育や仕事のあり方が大きく変化する中で、人間の知性とは何かが問われている。そのような時代において、文学は知性や感性を磨く重要な役割を持っており、さらなる可能性を有している。

【委員】
　持続性が重要である。文学に関わる人を増やすことも難しいが、それを継続してもらうことはさらに難しい。例えば、小学生がイベントをきっかけに俳句を始めても、その後継続しているかは分からない。一般の方でも、仕事をしながら継続している人は限られている。
　このため、関心の喚起だけでなく、持続性を確保する仕組みやスケジュールを構築することが重要である。

【委員】
　そのとおりであり、様々な取組がどのように人々の中で持続していくのかという点は、「生涯にわたって文学に親しめるまち大津」という目標に直結する。文学に親しめる環境を整えるのか、習慣を育てるのか、様々なアプローチが考えられる。

【委員】
　昨年の経験として、山形県新庄市でのまちおこしプロジェクトに関わった。子どもや若者にどれだけ伝えるかに重点を置き、踊りを通じて地域の歴史を伝えた。
　参加した子どもたちは、自らのまちの成り立ちや強みを理解するようになり、当事者意識を持つことの重要性を実感した。
　どのように子どもたちを当事者にしていくかが重要であり、その手段は拠点やイベントなど様々であるが、若者に焦点を当てた取組を進めていきたい。
　また、取組を進めるうえでは、関係者自身が楽しみながら進めることも重要である。絵本制作など新たな取組も検討している。誰にでも自分事として、取り組めるように「文学」のハードルを下げる必要がある。

【委員】
　市民が当事者となることは重要であり、文学の魅力を日常で実感できる仕組みづくりが求められる。例えば、東京では街中で文学作品に触れる仕掛けがあるが、市民自らが発信していく仕組みを考えることが重要である。小さな工夫によって大きな変化が生まれる。
　また、経済との結びつきも大事であるが、まずは市民の当事者意識を高める工夫も併せて重要である。

【委員】
　文学はより広い概念として捉えることが重要である。本が好きな人以外にとっては「文学」という言葉自体がハードルとなる可能性がある。
　そのため、「湖都の葉マルシェ」や「言の葉」といった表現のように、柔らかく伝える工夫が必要であり、「文学のまち大津」をより親しみやすく伝えるためのサブタイトルや表現の工夫について、将来的に検討できるのではないか。

【委員】
　文学という言葉はハードルを上げてしまう側面があるため、誰もが触れられるものとして捉えることが重要である。例えば、オリジナルのブックカバーを作るなど、小さな取組からでも参加できるような仕組みが必要である。枠を厳密に定めるのではなく、柔軟に進めていくことが望ましい。

【委員】
　青春 21 文字のメッセージ事業では、滋賀大学や膳所高校と連携し、言葉を絵にする取組を実施しており、文学と芸術の連携という新たな試みとして好評を得ている。

【委員】

ユネスコ創造都市ネットワークを目指すことは評価できるが、具体的なテーマ設定が必要ではないか。例えば、花登筐の生誕100年や、ヴュルツブルクとの姉妹都市50年など、身近な題材は数多く存在する。

湖都の葉マルシェについても、単に多様な要素を並べるのではなく、テーマを設定し、それに沿ったイベントとすることが重要である。

また、国内外の先進事例を収集・分析することも必要である。

【委員】

文学のまち大津においては、歴史的背景をしっかりと位置付けることが重要である。同時に、日常的な言葉や短い文章、例えばラインの文章でも文学として捉えることで、より身近なイメージを持つことができる。

【委員】

文学資源の価値向上は、裾野の拡大や受け手の視野の広がりにつながる。また、市民が幸福感を持てることも重要な視点である。

【委員】

現存する施設の活用や県との連携も重要ではないか。県立美術館や琵琶湖文化館などをより有効に活用し、連携して取組を進めていくことができないか。

【委員】

大津らしさのある文学賞の創設も必要ではないか。自然や琵琶湖、歴史といった地域資源を活かした、ここにしかない独自の選考基準を持つ文学賞があってもよいのではないか。

【委員】

若者への発信については、SNSの活用が重要である。写真や動画を含めた発信について早期に取り組む必要がある。

８）閉会